

アフリカへのヨーロッパ人の進出

今回学ぶこと

15世紀半ばに始まった大航海時代によって、世界の各地はヨーロッパ中心の航路ネットワークに結びつけられることになる。ヨーロッパの南に位置するアフリカ大陸もその例外ではなかった。17世紀以降に本格化した「大西洋奴隷貿易」や19世紀末から始まった「植民地支配」を通して、自国の経済的利益を追求するヨーロッパ中心の経済システムが、アフリカの人々にどのような影響を与えていったのかを学ぶ。

調べておこう・覚えておこう

- 17世紀から19世紀半ばまでの間にアフリカ大陸から1000万人以上の人々が新大陸へ連行された理由を、ヨーロッパや南北アメリカ大陸の歴史と合わせて調べてみよう。
- 19世紀になってヨーロッパ人がアフリカ大陸の内陸を探検し、キリスト教を布教するようになった背景を考えてみよう。
- アフリカ大陸を植民地支配した国々はどこで、いつごろからいつ頃まで支配していたかを調べてみよう。

大西洋奴隷貿易

7世紀以降、西アフリカの内陸地域や東アフリカの海岸地域はアラブ世界との交易で繁栄した。この時代、西アフリカの内陸にはガーナ・マリ・ソンガイといった大王国が次々と登場し、東アフリカの海岸地域では現地の文化とアラブの文化が融合してスワヒリ文化が生まれた。しかし15世紀半ば以降、ヨーロッパ人がアフリカの海岸地域に進出したことでアフリカの状況は大きく変化した。

新大陸のプランテーションでの労働にアフリカの人々が奴隷として用いられることになり、アフリカは大西洋で成立した「三角貿易」の一角を担わせられることになる。武器や装飾品といったヨーロッパ産の製品と引き換えに、アフリカの海岸地域から若者を中心とする数多くの人々が奴隷として「輸出」され、新大陸へと連れ去られた。その数は17世紀から19世紀前半の間で少なくとも1000万人以上とされる。奴隷たちが新大陸で生産したサトウキビや綿花、煙草な

どの農業産品はヨーロッパで商品に加工され、莫大な富をヨーロッパにもたらした。こうしてヨーロッパでは後に起こる「産業革命」の基盤が形成された一方、アフリカでは多くの貴重な労働力が奪われ、経済発展が遅れる一因となった。

探検とキリスト教伝道

18世紀後半にイギリスで最初に起こった産業革命は、工業中心の経済体制への移行を促した。新大陸でのプランテーション経済の重要性は低下し、それにともなって、プランテーションで働く奴隷の需要も低下していった。奴隷に代わってヨーロッパの工業国がアフリカに求めたのは、工場での生産に用いる天然資源であった。

19世紀初頭以降、ヨーロッパの探検家はアフリカの内陸部を探検し、現地の人々へのキリスト教の布教を試みる一方で、さまざまな天然資源の存在を確認し、その結果を本国へ報告した。彼らの探検などによって、19世紀後半にはアブラヤシや天然ゴムなどの植物資源に加えて金やダイヤモンドの鉱山も発見され、ヨーロッパの各国によるアフリカの資源獲得競争は激しさを増すことになった。

植民地支配

アフリカでの権益を巡ってヨーロッパ各国の争いが激化していた1884年、ドイツの首相ビスマルクの呼びかけで「ベルリン西アフリカ会議（ベルリン会議）」が開催された。この会議でアフリカを植民地支配する際の約束事が決められたことをきっかけに、ヨーロッパ各国はアフリカへの侵略を本格的に着手し「アフリカ分割」が開始された。

その結果、20世紀初頭には、エチオピアとリベリアを除くアフリカ大陸のほぼ全ての地域がヨーロッパの植民地支配下に置かれることになった。植民地ではヨーロッパ宗主国の言語が公用語とされ、政治においても宗主国の代表が決定権を握った。文化の面でも「同化政策」などヨーロッパ中心主義的な方針が採用され、現地の文化は軽視された。さらに経済の面では、天然ゴムや鉱物資源、カカオ、落花生、棉花など宗主国が必要とする一次産品の生産のみが奨励され、少数の作物や資源の生産に依存する「モノカルチャー」経済の基盤が形成されるに至った。